

内発的動機と運動意欲の関係 —ヨコミネ式保育との比較を絡めて—

The relationship between spontaneous motivation and motivation to exercise
— In connection with its comparison with the system of Yokomine
nursery school education —

竹内 進*
TAKEUCHI Susumu

要 旨

本研究は、前任校である大阪千代田短期大学の研究紀要に2012年に掲載したものを再検討し、加筆・修正したものである。中身は、保育現場の子ども達の姿を数年に渡って観察研究し、課題を明らかにしてきた。そして、その課題を追求していくための手立てを検討したものである。これらの手立ては、机上で検討しただけのものではなく、実際に現場で実施した物である。基本的に子ども達は素直であるため、保育者や現場全体が不勉強で、間違った保育や教育を進めていても子ども達は不満を言ったりせず一生懸命取り組む。しかし、幼児期の間よくわからないままにやってきたが、本当の意味で「自分からやりたい」という気持ち（内発的動機）でやっているのかは疑問に思う。そこで内発的動機を理解し、今までの保育の姿を点検し検証していくことにした。その際、マスコミで取り上げられてきたものを例に問題点を明らかにし比較検討も行った。マスコミの力は絶大であり、圧倒的な広がりを見せている。そこで「誰かが歯止めをかけなければ子ども達は救われない」と、そんな思いを込めて保育現場への警鐘的な視点でまとめたものである。

キーワード：内発的動機、運動意欲、ヨコミネ式保育、全人格的発達

I. はじめに

TVの「エチカの鏡 ココロにキクTV」(注1)という番組で、プロゴルファー横峯さくらの叔父である横峯吉文(よこみねよしふみ)理事長が経営している通山保育園で考案されたヨコミネ式教育法が紹介された。子ども達はそのテレビの中で、鍵盤ハーモニカで絶対音感を育て、文字を使った学習も取り入れていた。高い跳び箱を跳び、ブリッジや逆立ちをしながらグラウンドを走る姿に衝撃を受けた人が多いようだ。テレビの影響力は大きく、あっという間に「ヨコミネ式保育を取り入れています」という園が全国に沢山誕生している。(2012年頃に調べた時点では約100カ所だったものが、2014年9月現

在333箇所の幼稚園と保育園が取り入れていると紹介されている)

子どもが体育嫌いになる初めての年齢は4歳だと言われている。それにはこういう裏付けがある。人間が誕生してから幼児期(4歳頃)を経て児童期(9,10歳頃)までは、大脳皮質を中心とした神経系が急激に発達する時期にあたる。この神経系の発達があるからこそ、運動コントロール能力が高まるのだ。その力が急激に発達するのが幼児期(4歳頃)で、運動コントロール能力の急激な発達は、80を超える基礎的運動パターンというかたちで現れる。下記に示した表1(注2)が

* 大和大学教育学部教育学科(初等幼児教育専攻)

(表1)「運動保育の考え方」赤塚徳朗編著(明治図書)1984年P68を筆者が補正したもの。

| カテゴリ | 平衡系 14 | | 移動系 27 | | | | 操作系 42 | | | | | | |
|-------|--------------------|--|-----------|------------|--|-----------|------------|--|------------|------------|--|------------|--|
| | 姿勢変化 平衡動作 14 | | 上下動作 9 | 水平動作 11 | | 回旋動作 7 | 荷重動作 13 | | 脱荷重動作 5 | 補促動作 11 | | 攻撃動作 13 | |
| 各々の動作 | 0 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| | 3 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| | 4 | | | | | | | | | | | | |
| | 5 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | |

その表である。幼児期から児童期の初め頃までに、これらのすべてが現れると言われている。この運動コントロール能力発達の急増期は、また、発達の適時期でもあるとされている。適時期とは、ある能力の発達に環境が最も適した時期ということである。だから、この時期に適切な運動をすれば運動コントロール能力発達に敏感に作用し、運動コントロール能力を最も容易に高めることができるということになる。そんな時期だからこそ、レベルの高い運動を毎日継続させているのだから、あれだけのことが出来ていくのもうなづける。ここまで述べればお分かりの通り、その反対の状況が生まれれば、付けられるべき力を付けられず仕舞いになる。そうすると、周りの友達が色々な事を上手く出来ている側で、何も上手く出来ない自分が居る。そんな自分の姿を客観視出来る4歳だから、劣等感にさいなまれたり、失敗することや、負けることを極端に恐れて「やりたくない」と、体育嫌いになるのである。入園したもののどうしても馴染めず、登園拒否や退園したという話もあり得ない話ではない。

II. 研究の方法

当研究では、まずヨコミネ式保育の現状と分析を、映像や書籍、ホームページから分析し成果や課題を明確に

する。そして、人間の動機について先行文献からヨコミネ式保育の実態と絡めながら整理していく。その際、子どもたちの運動意欲と身体的発達の軸を絡めることも行いたいと考えている。また、先行実践と筆者が行っている実践との比較を保育現場の子どもたちの姿から検討して分析する。

III. ヨコミネ式保育とは？

1. 研究の内容

「人間の才能である心の力・学ぶ力・体の力をつけさせ、子どもたちが生まれ持っている〈可能性〉を最大限に引き出すための教育です。」と、横峯氏のHP(注3)に記載されている。また、こういう教育が大事だと説明している。「心の力とは、正義感や道徳観などといった心に関するものです。(中略)そのような子どもたちにさせないためにも、幼児期からしっかりと心の力を育てていかなければいけません。学ぶ力とは、理解力と思考力、洞察力を兼ね備えた力のことです。“1を聞いて10を知る=達人”,次にどうなるか即座に考える、うわさに流されない、正しいことを正しいと見抜く力です。この力をつけるために、ヨコミネ式教育では読み・書き・計算を行っています。体の力とは、体力や柔軟といった力のことです。ヨコミネ式教育では、走力、泳力、柔軟

性、体操にも力をいれています。何故、幼児体育にそこまで力をいれるのか？理由は、10歳ほどまでの幼少期に、バランス感覚といった体に関するものを司る小脳ができあがってしまうからです。簡単に言えば、小脳を刺激し、良い運動神経を高めること。小脳が完成してしまう10歳を過ぎてしまえば、かなりの努力をしないと運動神経は高まらないのです。」

以上のようなことを実施していくために、横峯氏は「子どもにはやる気にさせる4つのスイッチがあり、このスイッチを入れてあげるだけで、後は放っていても勝手に伸びていくんです」と言っている。その4つは、

- ①子どもは競争したがる
- ②子どもは真似したがる
- ③子どもはちょっとだけ難しいことをしたがる
- ④子どもは認めて貰いたがる

この4つのやる気スイッチは、③を除いては外発的動機によって仕組まれた物である。保育の現場では④のスイッチは、子ども達の頑張りを認めて我がことのように喜んであげる。これが無しには幼児教育は成り立たないとまで言えると思う。だから、外発的動機づけで行動するというのを悪いことばかりとは言えない。とはいうものの、外発的動機づけに過度に依存してしまうと弊害が出てくると、アメリカの評論家アルフィー・コーン(注4)が批判をしている。そこから7つの視点として、外発的報酬が悪影響をもたらす理由を上げているのが以下のものである。先の5点は、この問題の先陣を切った(注5)の主張であり、そこにコーンが(6)と(7)の2点を加えたものである。

- (1) 報酬は、罰になる (Rewards punish)
- (2) 報酬は、人間関係を破壊する (Rewards rupture relationships)
- (3) 報酬は、理由を無視する (Rewards ignore reasons)
- (4) 報酬は、冒険に水をさす (Rewards discourage risk-taking)
- (5) 報酬は、興味を損なう (Rewards kill interest)
- (6) 報酬は、使い出したら簡単に止められない
- (7) 報酬は、それを得るための手抜き (最短ルート) を選ばせる

ヨコミネ式保育の紹介の映像の中の子ども達は、数秒間隔で7段の跳び箱をどんどん跳んでいき、逆立ちで歩きまわっている。その姿だけを見れば素晴らしい出来映えである。上手に出来ている友達の姿に負けまいと、観察をして真似をしていく中で上手になっていくという。悔しくて歯ぎしりしそうな表情で、友達をにらみつけているそんな映像を捉えて、TVのゲストが評価するコメントを述べていたが、本当にあれが子どもらしい姿なのだろうか？上記で説明した「(2) 報酬は、人間関係

を破壊する」をさらに説明している。

デミング(注6)は、個人ベースの誘因プログラムには、働く人たちの協働、協力を低下させるマイナス面があることを指摘した。成果主義も、導入・運営によっては、個人の力を高めるつもりが、集団の力や団結、集団内での自然なスキルの伝承や相互学習を阻害することがあるのだと言う。報酬(競争)で、勝ち組と負け組が出てくるなら、人間関係はどうしてもギスギスしたものになる。競争が不安を生み出し、勝つ見込みがないと思う人は努力しなくなる。競争の結果が努力でなく、運や能力など(自分でコントロールできない要因)に帰属しがちになる。コーンは、このような事実を報告する研究でこの様に説明した。

実際、ヨコミネ式に子どもを通わせていた保護者の言葉がネットで以下のように掲載されていた。「毎日毎日競争競争で親子とも疲れてしまいます」「出来る子が出来ない子を馬鹿にする風潮があります」等。出来る子が出来ない子に教え合う姿はないのだ。毎日の継続でそれなりに出来ていくだろうし、それを悪く言うつもりは無いが、就学前の子ども達に対してあれだけの時間をかけると言うことは、その分他の園に通う子ども達と比較すると何かが犠牲になっているのでは無いだろうか。自分自身の子ども時代を思い返してみても、小学生の頃でさえあれだけのことが出来ていた子はいなかった。出来なければならぬという必要性も感じなかった。

2. 運動コントロール能力を高めるために

運動コントロール能力を高めやすい運動とそうでない運動があるが、効果的に運動コントロール能力を高める運動経験の原則は“運動の多様性”であることが明らかにされている。運動の多様性にはふたつの側面があるが、まずは、先に述べた基礎的運動パターンの多様性である。すなわち、幼児期には走る、跳ぶ、投げる、打つなど、できるだけ多様な運動パターンを経験することが大切になる。

もうひとつは、同じ運動パターンのバリエーションである。走るという運動を例にあげれば、いろいろな方向に、いろいろなスピードを変えて、いろいろな場所で走るといった経験が大事だ。したがって、同じような運動をいつも繰り返しているといった運動経験は、幼児期の運動発達にとってふさわしいとは言えない。かなりの幼稚園でマラソンや体操や跳び箱などの運動指導が行われているが、これらの運動はいつもよく似た同じ運動の繰り返しになり、多様性の原則からみると幼児期の発達的特徴に応じた指導とは言えない。特に適時性で言うと、幼児期は持久力がつけにくい時期であるので、いつも同じ走りを繰り返すマラソンより、走るスピードや方向を変えて相手の動きを予測して走る追いかけっこや鬼ごっ

こなどのほうがはるかに多様なバリエーションを含んでおり、幼児期にふさわしい運動ということになる。

ヨコミネ式のやる気スイッチの一つである、前述した③子どもはちょっとだけ難しいことをしたがる、というのは、「子ども達は挑戦するのが好きなんです。少し難しい課題を与えてやると喜んでやります。ほっといてもやります」と言っている。まさにヴィゴツキーの最近接領域（注7）にかなった考え方である。しかし、やりたがるからといって継続して取り組ませるための教材として、幼児期にそこまで高度なことに取り組んでいくのかどうかの検討は必要だと考える。

3. 幼児期の運動意欲の広がり和社会的動機

幼児期に入ると目標意識の現れとともに成功や失敗が意識されるようになり、他者からの評価にも注意が向けられるようになることから、**社会的動機**が芽生えはじめる。社会的動機とは人間関係の中で生じてくる動機のことである。幼児期に芽生える運動と関係の深い社会的動機の例をあげると下記の様になる。

- ①自分の大切な人から認められたいという**承認動機**は、子どもが“見て見て！”と先生にアピールしたり、“よくがんばったね”と褒めてもらいたくて運動しているときに働いている動機である。
- ②ご褒美がほしくて一生懸命運動に取り組むのは**獲得動機**である。
- ③先生や友達と仲良くしたい、一緒にあそびたいというときに働いているのは**親和動機**です。
- ④競争して人より優れたたいと言うのは**優越動機**で、この動機の強い子どもは負けず嫌いである。優越動機は特に、勝ち負けを強調する周りの環境によって影響を受けやすいとされている。
- ⑤けんかをするとき働くのは、力づくで他者をやっつけたいという**攻撃動機**である。
- ⑥下手で恥ずかしいことを避けようとするのは**屈辱回避動機**である。

どのような動機をもつかは子どもによって大きな個人差があるので、それぞれの子どもの状況を把握して、理解してあげるのも大事なことではないか。

この動機で見たならば、果たしてヨコミネ式の4つのスイッチはどのようなだろう？①の子どもは認めて貰いたがる。という物は、この動機で見ると①の承認動機ということになる。TVの中で先生達は「男の子は特に『カッコいい！』と言うと一生懸命頑張るんです」と言っている。子ども達は先生に声をかけて貰いたい、お母さんやお父さんから誉めて貰いたいから一生懸命頑張るということだ。

誰しも自分がやっていることを認めて欲しい、評価して欲しいという気持ちがあるし、誰も認めて貰えないような自己満足では続かない。けれども、保育の方針の中に位置づけて、これを強調していく保育となるとやはりひずみが来ることは予想出来る。卒園し小学校に行ったヨコミネ式保育の子ども達は、その他大勢の子ども達の中で「先生見て見て」のアピールが、人一倍強い子どもになっていることが多いらしい。小学校の先生は保育園とは対応が変わるので、それらの違いに馴染めず、認めて貰える機会の激減と共にやる気が失せていく図式がはっきりと見える。

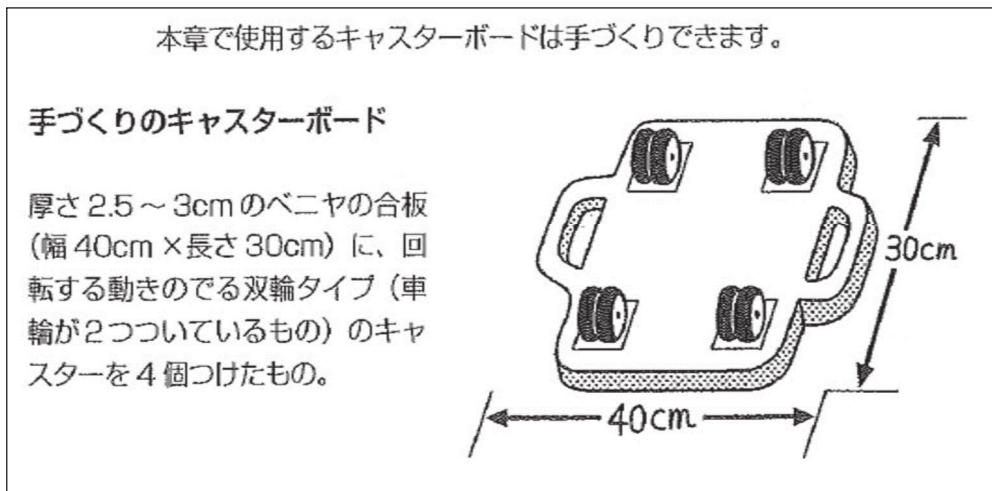
このように幼児期にはさまざまな社会的動機が表れはじめるが、乳児期から引き続き運動に対する動機として非常に大きな位置を占めるのは**内発的動機**である。幼児期以降の内発的動機は「自己決定と有能さの感覚」を追求する動機であるとされている。好奇心に基づいて自分が興味をもつ活動に全力で取り組んだり、新しいことに挑戦したりして自分の能力を向上させたいという気持ちが運動の大きな動機となる。一生懸命努力してできなかった運動ができるようになったときの「できた！」とか「やった！」という子どもの喜びは、内発的動機が満足された表れの典型と言っていいだろう。最初のきっかけが、承認動機に支えられてやっていたものが、「やってて気持ち良いから」とか「好きで好きでたまらないからやってる」というぐらになっていけば、**内発的動機**が育ったんだとなるだろう。だから、ヨコミネ式保育で育った子どもの中でも、子どもによってはうまくいった例もあるかも知れない。ただし、⑥の屈辱回避動機をもつ運動の苦手な子どもたちは、ヨコミネ式保育では運動に対する苦手意識をぬぐい去ったり運動に対する内発的動機は育たないだろうことは断言出来る。

4. キャスターボードあそびについて

キャスターボードあそびとは、約30cm四方の正方形の両側に取っ手と、裏側に4つのキャスターがついた道具（キャスターボードと私は呼んでいる自作教材。図1注8）を使うあそびである。この教材は障害児に教育の現場で勤務していた際、考案したものである。障害を持った子ども達の多くは、運動が苦手でもやりたがらないことが多いのだが、このあそびを拒否する子どもは少ないものである。保育士養成系の短期大学に勤務した頃より保育の現場でも有効だろうということで普及につとめている物である。

全く別のものだが、幼・保の子どもの体育的活動として、全国的に有名なりズム運動は、埼玉県の「さくらさくらんぼ保育園の斉藤君子（注9）が始めたもので日本

図1 ●●●●●●用具について●●●●●●



全国で広がっている。幼・保の現場では大変ポピュラーであり優れた運動である。しかしながら、その中での問題点や疑問点を拙文「保育現場での体育的現状と課題」(注10)の中で、以下のようにまとめた。(アンダーラインの説明)

「ある保育園を訪問した時のことである。予定時間より早く到着した園で、準備が整うまで5歳クラスのリズム運動を見せていただいた。突然の訪問者に臆するどころか、私達の目を意識しながら意気揚々とした姿で取り組んでいた。動きは洗練されていて2班に分けられた子どもたちが、先生のピアノと声によってきびきびと動いていた。が、その時一人の子どもが、無表情で椅子に座ったままであることに気付いた。友達がやっているのをぼんやりと見ているだけだった。気になったが関わることも出来ず、その後4歳クラスの子もたちの所に移動した。キャスターボードをただプレゼントするだけでなく、実際に子どもたちと関わって欲しいということになった。4歳のクラスの子もたちは、初めての体験に大興奮だった。嫌がる子もいなくて楽しそうだった。そのうちに5歳クラスも合流して一緒にやった。すると、リズム運動の時と同じように、楽しそうにしながらも整然と行われていた。その時、リズム運動では座っていただけの子も、笑顔で取り組んでいるのがわかった。担任や主任の先生も意外そうな表情だった。給食後園庭での自由あそびで、彼が足に軽い障害があるのが分かった。」

そのリズム運動が持つ問題点である。苦手意識や、やりたいという意欲不足を感じる子ども達は、前述した動機の項目では⑥の屈辱的回避動機を持たせてしまうからなのだと思う。それとは反対にキャスターボードあそびは、⑥の動機を持ちにくく「とにかく楽しそう。やりたい」と思わせてしまう。これらの動機のとっかかりは①や③でもなくただ単純に自分の内面から起こる動機である。詳しい分析は後述するとして、内発的動機であるこ

とは間違いがない。そのあたりの場面を捉え、「たのしそうに運動しているみんなのかわらで、ぼつんと無表情で座ってる子はいませんか。みんなの輪から離れ、一人で走り回っている子はいませんか。その子たちには、明らかにこの運動に対する拒否感があるように見えます。〈なぜ、その運動に拒否感を持つのか(=やりたくないのか)〉と考えると、調整力と言われる力の獲得の状況が大きく影響していると思われます。子どもは小さい頃から自分の身体を使って様々な動きを積み重ねている内に、どんどん巧みに体を動かせるようになります。手足の連動や左右の連携、スピード調節やリズムカルな動き、テンポを合わせる動きなどの力を十分に獲得していないから「自分の体をどう使えばいいのかわからない」、だから「しない」とか「おもしろそうじゃない」と思ってしまうと考えられます。そんなとき「やってみたいなあ」と思わせる教材であれば、「みんなと一緒に体を動かす」ことができます。このキャスターボードあそびは拒否感を持ちにくいもので「何かしらたのしそう」と思え、我先にやりたがります。「こんなふうにするんだ」というやり方が伝わりやすく、一度体験した子どもは、すぐにキャスターボードあそびの楽しさの虜になる。」(注11)というような教材であるとして、著作の中で紹介しているものである。

このキャスターボードがほとんど拒否感がないということは、苦手感を持ちにくい(巧くやれないかもしれない)という感覚が持ちにくい教材である。前項で述べた動機で言うと⑥の屈辱的回避動機がない。そのため、身体イメージが持ちにくく身体コントロールが苦手な子どもたちや、四肢を動かすににくいというハンディを持った子どもたちや、LDやADHDといった発達障害の子どもたちにまで有効な教材である。そして、この教材に慣れてくるにつれて、「あんな風にやってみたい」「もっと上手になりたい」「出来たよ。見て!」「こんなことも出来

るよ」等々①や③の動機が出てくる。そして、個人で行うものだけでなく二人組で行ったりする動きやロープや三角コーンといった物を使うことで、ゲームの感覚や「みんなと一緒にやるのもしろいから好き」といった④の親和的動機も発生しやすいが、全て「なんかおもしろそう！やってみよう！」との内発的動機がベースにある。そして、あそび感覚で行っているのにも関わらず、知らず知らずの内に腹筋背筋等の筋力も付き、調整力のバランス感覚、スピード感覚、回転感覚等の力も付けられていくことは明らかである。保育現場での体育的活動の様子を見ていると、「逆上がり」「跳び箱7段」「逆立ちや側転」といった教材（種目）ありきで、運動会のためにこれらの種目に取り組む。これらの種目が出来るようにこの種目で、この種目が出来るように練習させる。ということになっている。そのため「運動会3週間前から側転に取り組ませる」と即席体操教室が展開される。勘の良い子や元々体操教室で出来ていた子だけが救われ、多くの子どもが中途半端な出来映え止まりであったり、無理矢理やらされ落ち込み「運動会大嫌い」という気持ちにさせてしまうことも多いと聞く。子ども達の出来映えが悪いと指導力不足の評判が立つので先生にとっても必死で「何のために？誰のために？なぜ逆上がりや側転なの？」が何も語られず悲劇が毎年繰り返されていく。出来ない子をどの様に当日誤魔化して見せるのが重要なポイントになっている。寂しい取り組みの結果である。

5. 継続的な取り組みのおかげで

東大阪市ポッポ第2保育園の山下みなみ保育士の実践では、2歳クラスからキャスターボード運動に取り組んだ。2011年には年長児クラスとなった。この間ずっと継続的に実施してきた子ども達は、キャスターボードを苦もなく操り匠の技を連発してくれる。この園では、リズム運動にも取り組んでいるのだが、例年の3歳児や、4歳児のリズム運動と出来映え（身体の使い方など）が、明らかに違うという話も聞いた。また、この園では4歳児の運動会で「竹登り」に例年取り組んでいるそうだが、この年はあつという間に全員がクリアしたそうだ。例年であればなかなか出来なくて大変な取り組みであるはずなのに、なんの苦労もなく出来たそうである。これは、どういうことなのか？「竹登り」に必要な手足の筋力や、腹筋、背筋といった基礎的な運動能力が、キャスターボードあそびによって付けられていたのだと思われる。例年の子ども達は、リズム運動やその他のあそびは行っていたが、キャスターボードあそびには取り組んでいなかったので、「竹登り」に必要な筋力等が付けられていない子ども達は苦勞するのだと思う。筋力がないと登るのは大変だし、恐怖感もあるだろう。簡単に上がれないと時間もかかるので体力の消耗も激しいだろう。そして、苦

手な子ども達は「竹登り」を成功させるために必死にはなるだろうが、なんとしても登りたいというモチベーションが持ちにくいのではないかと思う。別教材での竹馬が苦手な子もいるが、竹馬は「上手に乗りたい！」と、思う子は多い。かなり両教材への意欲の持ち方には差があると思う。そして、竹馬が上手に乗れるようになるには、手足の連動、左右の連携、バランス感覚といった調整力の分野の力や感覚を身につけ、コツを掴むと言うような部分もある。色々な練習段階もあるので、アドバイスもしやすい。しかし、「竹登り」の場合は、これぞというコツというようなことがあるわけでもなく、身体の使い方と、筋力勝負。高さへの恐怖感を無くさせるとか諦めない気持ち等々、指導する側も辛い教材ではないだろうか？どうしても出来ない子がいた場合、出来る子との差は歴然であるため、子や親も、保育者も追い込まれやすい教材ではないかと思う。その割に苦手な子が、やり切った当日も『できた。ほっとした…』という安堵感であり、『やりとげた！』という達成感や充実感が得にくい教材のように思えてしまう。全ての子ども達がそうであるとは言い切れないが…。少々話の流れの本題と、はずれてしまいかけたので戻すが、キャスターボードを教えるのではなく、キャスターボードであそんでいる内に、姿勢制御を中心とした様々な力が付いているということなのである。「竹登り」では、竹登りの登り方を教えることになり、そこでは、腕や足、そして腰や腹の筋力を育て、筋持久力や諦めたり怖さを越えるための精神力を育てるということになるのか。うまくいかない子どもにとって、プレッシャーの中で「何とかしなければ」と必死になって取り組むだけの教材なのだろうと思う。運動会の演技として「竹登り」が4歳にふさわしい体育あそびの教材としている園が多いが、直線的に「竹登り」に取り組まずに、キャスターボードであそんでいる内に基礎的な力が養えるのなら、その方が良いに決まっている。同志会では「マット運動では前転からではなく、側転から」「鉄棒なら前回りや逆上がりではなく足かけ回りから」「跳び箱は開脚跳びからではなく横跳びこしから」の指導の流れが誰もが躓きにくい系統性指導として確立されている。「竹登り」に行く前にキャスターボードあそびをふんだんに実施することが「竹登り」の系統性指導になるかもしれない。もっと、色々な園で普及するように支援していきたい。大阪府内を中心に様々な保育園や幼稚園で少しずつ広がっているが、特に吹田市内の公立保育園での拡がり はめざましいものがある。吹田市の公立園18園の内ちょうど半分の9園で取り組まれている。

IV. まとめ

ヨコミネ式保育の映像は衝撃的である。授業等で学生や現場の先生方に見て貰うと、感嘆の声が上がる。その声の中身は、「凄い、こんな年齢でこれだけのことが出来るんや」という驚きと、『もし、自分自身が幼少の頃これだけのことが出来たら…』と、羨望の声が大半である。「もしあなたに子どもが出来て保育園に預けるとしたらどうする？」という問いにも、「入れたい」という声も多い。勿論、最初から「凄けれど、保育園時代にここまで出来なくてもよい」という考えを持っている者もいるのはいるが、他園との比較や本学での授業での取り組みを思い出させながら、価値観のお仕着せにならぬよう配慮しつつ本物を見極める目を持つことの重要性を説いている。体と頭と心が同時に成長していかないと、どこかでひずみが来る。競争社会の現在だから、幼い頃から体験させていくと結果的に子どもたちは伸びていくという。しかし、そんなに急がせてどうするんだろう？幼少時期だからこそ大事にしなければならぬことがある。ヨコミネ式以外にも右脳教育に取り組む時間設定は、本来は子どもたちが課業として取り組める遊びの時間だと思う。ごっこ遊びや伝承遊び、散歩や自然体験等々。空想や工夫、なりきりや憧れ、けんかや仲裁、行きつ戻りつしつつ、自己主張や他人への思いやりや配慮などなど。教科書通りにはいかない大切な学びの数々。それらを身につけるチャンスである遊びの時間が圧倒的に不足していると思う。小・中・高・大学・社会と嫌でも競争していくのだが、そんなことまで先取りさせる必要は全くない。本文でも語ってきたが、幼保時代に身につけられた力は、本当の意味で自分の力にはなっていない。親も子ども毎日毎日が競争の連続で、常に緊張と興奮で疲れてしまうと言う声も聞く。上辺の形や出来映えではなく、目に見えにくいものも含めて子どもをトータルで見っていく必要がある。

本研究で見えてきたものを、整理し提案する。

- ①幼児期から小学校低学年の間には、自らが面白いと感じる体験をさせること（提示すること）、考えを変える者も多い。
- ②自分自身で決めて実施する事を大切にしていく。
- ③上記の2点を意識して保育、教育に当ることが大事なのである。
- ④そういう経過を経て、有能感や自己決定感の力を育む。
- ⑤そのことは、自ら学ぶ意欲をもたらし、楽しさや満足感が生まれる。
- ⑥そして、高度な意識に繋がり、その経験を通して内発的動機づけが高まる。
- ⑦その流れが大事であり、外発的報酬を与えることそのものが悪なのではない。

⑧その報酬が有能感と自己決定感を阻害しなければ、外発的な報酬が与えられたとしても、内発的動機付けは阻害されない。

⑨金銭的報酬や褒め言葉などによって、有能感と自己決定感を高めるなら、実は、内発的動機付けを高めることになる。

⑩ただし、「健全な対人交流と他者受容感も育っている環境であれば」となる。

このことを忘れてはいけない。

引用文献

- (1) 赤塚徳郎が『運動保育の考え方』赤塚徳郎編著（明治図書）1984年P 68で整理している。その表(表1)を基に、筆者が各運動パターンの出現時期を年代時期と種類ごとに見やすく分類し、筆者が改良したのが次の表である。
- (2) 黒井信隆・山本秀人編著『0～5歳児のたのしい運動あそび』いかだ社2010年3月発行 竹内進執筆分担P142
- (3) 竹内進著『保育現場での体育的現状と課題』大阪千代田短期大学研究紀要第37号2008年12月
- (4) 黒井信隆・山本秀人編著『0～5歳児のたのしい運動あそび』いかだ社2010年3月発行 竹内進執筆分担P140

注 釈

- (1) 2008年10月19日から2010年9月19日までフジテレビ系列にて毎週日曜日21:00 - 21:54に放送されていた情報・バラエティ番組である。
- (2) <http://www.cosmo.bz/azc/>
- (3) ブラウン大学、シカゴ大学でトレーニングを受け、現在は「ザ・アトランティック」、「ザ・ネーション」、「サイコロジー・トゥデイ」、「ニューヨーク・タイムズ」などの新聞や雑誌に寄稿し、教育のみならず人間行動の全体をカバーする社会理論について論じる評論家として活躍している。
- (4) 最近の心理学では内発的動機付けに関する研究が進み、様々な成果が上げられているが、その中でも内発的動機付けの研究の第一人者と言えば、エドワード・L・デシの名をあげることができる。※報酬、強要、脅し、監視、競争、批判的評価によって、人を統制するように動機づけることに、反対の烽火をあげた元祖は、デシである。
- (5) ウィリアム・エドワーズ・デミング (William Edwards Deming, 1900年10月14日～1993年12月20日) は、アメリカ合衆国の統計学者、著述家、講演者、コンサルタントである。学位は博士 (イエール大学・1928年)。ニューヨーク大

学経営大学院教授などを歴任した。

- (6) レフ・セミョノヴィチ・ヴィゴツキーは 1896 年 11 月 17 日 - 1934 年 6 月 11 日) はベラルーシ出身、旧ソビエト連邦の心理学者。10 年ほどの短い研究活動の中で、発達心理学をはじめとする幅広い分野について数多くの実験的・理論的研究を行ない、37 歳の若さで世を去ったが、最晩年に提出した概念である。
- (7) 1920 年、島根県隠岐に生まれる。1939 年、東京女子高等師範学校保育実習科卒業。
1956 年、「さくら保育園」創設。1967 年、埼玉県深谷の農村部に季節保育所（現在のさくらんぼ保育園）創設。その後、さくら・さくらんぼ保育研究所長。